

プルーストと「ゴンクール日記」

和田，章男
大阪大学大学院文学研究科：教授

<https://doi.org/10.15017/26083>

出版情報：Stella. 31, pp.87-102, 2012-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



プルーストと「ゴンクールの日記」

和田 章 男

『失われた時を求めて』の最終篇『見出された時』に収録されたゴンクールの虚構の未刊日記は、表面的な観察に基づくレアリズム文学の例証として、主人公に文学に対する失望を味わわせるとともに、真の文学の啓示へと飛躍する重要な契機となっている¹⁾。本稿では、プルーストが「ゴンクールの日記」にどのような関心を持ち、自らの小説にいかに採り入れようとしたかを、主に草稿資料の調査に基づいて考察する²⁾。

プルーストは第3共和政が始まる1871年に、パリ西部に位置するオートゥイユの大叔父の家で生まれた。オートゥイユはオスマン知事によるパリ大改造の一環としてパリに組み入れられていたものの、当時はまだ田園の雰囲気が残る地区で、作家たちの別荘も少なくなかった。ゴンクール兄弟もまた1868年から同地のモンモランシー大通り53番地に居を構えるようになった。それはプルーストが生まれる3年前のことで、その生地から程遠からぬところだった。18世紀フランスの美術工芸品や日本の版画、骨董品などが所狭しと飾られたゴンクールの家は、「屋根裏部屋 Grenier」と呼ばれ、作家や芸術家たちが集まる文芸サロンでもあった³⁾。しかしながら、プルーストがエドモン・ド・ゴンクールと出会ったのは、アルフォンス・ドーデ宅のことである。すでに弟ジュールは亡くなった後のことで、プルーストは晩年にその出会いを20歳頃のこととして語っている⁴⁾。実際のところ、彼が友人レーナルド・アーンの紹介によってドーデ家に入出入るようになったのは、1894年12月以来のことなので⁵⁾、ゴンクールと出会うのはその後、つまり23歳頃のことだったと思われる。

19世紀末には、作家が主宰する文芸サロンが興隆する。マラルメの火曜会やゾラの木曜会はそれぞれ象徴主義と自然主義の牙城として知られる。ゴンクール家とドーデ家の集まりはそのような文芸サロンの草分けだった。若きプルーストもドーデ家に招かれるようになったものの、1895年の夕食会の際には、会

食者たちの文学に対する物質主義的な見方に驚いている⁶⁾。ドーデ家にはリアリズム、自然主義を標榜する作家たちが主に集まっており、その中にエドモン・ド・ゴンクールもいた。というより、まぎれもなくその中心人物だった。ドーデ家の長男レオンや次男リュシヤンと親しく交際するようになるブルーストは、ゴンクールにとってほとんど存在感はなかったようで、その日記の中でレーナルド・アーンのことには触れてはいるが⁷⁾、ブルーストについては一切言及していない。リアリズムに反するブルーストの文学的志向は、逆説的にドーデ家の文芸サロンの中で育まれたのかもしれない。

1. 草稿資料の中の「ゴンクールの日記」

『見出された時』に収録される「ゴンクールの日記」のパステイッシュ（文体模倣）に関わる草稿は、カイエ 55 とカイエ 74 に含まれている。それらが執筆された時期については研究者の間で意見が分かれている。クララックとフェレは、1919 年にブルーストがゴンクール賞を受賞した後のことと推定している⁸⁾。アカデミー・ゴンクールへの謝意、あるいは作家ゴンクールへのオマージュとしての「日記」導入と考えたようであるが、その否定的役割から考えても「謝意」や「オマージュ」とは考えられない。草稿を綿密に調査した吉川一義は、カイエ 55 に含まれる「日記」の草稿は 1915 年に執筆されたとみなしている⁹⁾。1915 年 11 月初め頃の執筆と推定されるシェイケヴィッチ夫人への献辞¹⁰⁾の中で紹介されているアルベルチヌの物語がカイエ 55 とカイエ 56 に基づいていることから、これらの草稿の執筆時期を同年同月より先立つことを論証するとともに、カイエ 55 に挿入されている「ゴンクールの日記」のパステイッシュもまた同時期と推定している。吉川一義の年代設定を補足するなら、コルブによって 1915 年 3 月と年代設定されているリュシヤン・ドーデ宛書簡には、「たまたま私はゴンクールの日記のある巻を開いた」¹¹⁾という記述が見られ、実際 1915 年の書簡には 4 回ゴンクールの日記への言及があり¹²⁾、この年に日記を再読したと推測できるのだ。

他方、ジャン・ミューは上記のリュシヤン・ドーデ宛書簡の年代設定が確かでないとし、ドイツの潜水艦沈没が当該草稿において比喩として用いられているとともに、同書簡でも話題となっていることに着目しつつ、同事件が起こった 1917-18 年を執筆年代と推定している¹³⁾。だが、書簡編者のフィリップ・コ

ルプの調査によれば、1915年2月の新聞にもドイツ潜水艦沈没の報道がなされている¹⁴⁾。ジャン・ミイーの年代設定の根拠も確かとは言えない。

「ゴンクール日記」に関するメモが多く見られるカルネ3の最初の数ページは1913年秋頃にかかれたと、アントワヌ・コンパニオンによって推定されている¹⁵⁾。その後に1914年の戦争勃発後と推定できるメモ、ゴンクール日記からのいくつかの引用、そしてジョゼフ・レナック、ジョルジュ・クレマンソー、アルスティード・ブリヤン、アンリ・ビドゥーによる新聞記事に基づきながら、それらの文体や語りの特徴を捉えたメモが続く¹⁶⁾。上で問題にしたリュシヤン・ドーデ宛書簡においても、毎日7種の新聞を読んでいることが告げられており¹⁷⁾、同書簡もカルネ3のメモとともに1915年前半頃にかかれたと推定できるだろう。

2. 「ゴンクール日記」の出版経緯と「未刊日記」

プルーストが発表した数々のパスティッシュは、様々な作家の文体の特徴を見事にとらえて、滑稽味の効果も上げつつ、独自の内在批評となるとともに、自分自身の文体の発見への軌跡を記している。1908年にはゴンクールの文体を模したパスティッシュを『フィガロ』紙に発表しているが、そのタイトルは「『ゴンクール日記』の中で Dans le «Journal des Goncourt»」である¹⁸⁾。他方、『失われた時を求めて』に収録されたのは「未刊日記 Journal inédit」のパスティッシュなのだ¹⁹⁾。「未刊 inédit」と限定したことは、ゴンクールの日記の出版事情との関連で、決して無意味ではない。

エドモン・ド・ゴンクールは生前アルフォンス・ドーデに勧められて、1887年から没年の1896年にかけて毎年1巻のペースで日記を刊行した。それには『ゴンクール日記、文学生活の回想録 *Journal des Goncourt, Mémoires de la Vie littéraire*』という標題が与えられた²⁰⁾。「日記」といっても個人の内面や感情の記録ではない。副題として付けられている「回想録 Mémoires」というジャンルは、個人の視点に基づく一時代の社会生活の記録なのである。「文学生活」もゴンクール個人の作家生活を意味するのではなく、交流のあった作家たちの日常の姿や言動のことである。実際、ゴンクールの日記には、サント＝ブーヴ、ジョルジュ・サンド、フローベール、ゴーチエ、ゾラ、テーヌ、ルナンなど著名な作家たちの日常生活や社交生活が克明に描かれる。「会話」をでき

るだけ現実の通りに記録していることもその大きな特徴だろう。しかも、ドーデを除く同世代の作家たちの人格・創作・思想などに対する評価はかなり辛辣である。したがってゴンクールが生前に出版した9巻から成るシャルパンチエ版はあくまで抜粋版なのだ。それでもなお同時代人から不満の声が上がったほどだった。

「日記」の完全版が出版されたのは、ゴンクールの死後50年が経った1956年のことである²¹⁾。つまりプルーストの時代には抜粋版しか読むことができなかったのだ。だが、公開されていない未刊日記の存在が知られていたことは注目に値する。

エドモン・ド・ゴンクールは1896年7月16日シャンプロゼーのドーデ宅で死去、74歳だった。2日後に公証人デュブランが、遺言執行人に指名されていたアルフォンス・ドーデとレオン・エニックに対してゴンクールの遺言を告げた。死の4年前の1892年5月に遺言が作成されている。おそらく70歳を迎えたためだったろう。その遺言書の中に日記に関する記述がある。1851年12月2日に弟とともに執筆を始めた「文学生活の日記」と題する一連のノート（「カイエ」）が戸棚に置いてあること、それらは作家の死後20年間の封印の後、国立図書館手稿部で公開されるとともに、印刷に付すことも可能とする旨が書かれている²²⁾。1897年12月にアルフォンス・ドーデも死去、長男のレオン・ドーデがゴンクール遺言執行人を引き継ぐことになる。

ゴンクールの死後20年が経過した1916年7月が、「日記」の公開および出版が可能となる期日だった。しかし戦争中であったため、アカデミー・ゴンクールは日記公開を5年間延長することに決める。戦後にも公開の期限をさらに延期することになるが、最初に延期が決められた1916年以降、いくつかの新聞や文芸雑誌がゴンクールの遺言の執行を求める抗議文を掲載するようになる²³⁾。ジャン・ミイーは、プルーストがゴンクール未刊日記のパステイッシュを小説に導入した理由として、新聞紙上で行われた日記公開にまつわる論争や抗議を挙げている²⁴⁾。たしかに未刊日記の公開は当時のアクチュアルな問題だったのだ。

第1次世界大戦後、公教育省大臣レオン・ベラルの要請によって、専門家および法律家から成る「ゴンクール日記」の調査委員会が設立されたが、調査の結果、公開禁止の継続が決定された。「公の秩序に反する」すべての文書の発

刊を禁ずる法律に従って、このように判断されたのだった。日記において言及されている人物たちがまだ生存していることも未公開延長の理由の重要な要素であった。

死後 20 年が経過する 1916 年に日記の未刊部分を公開するというゴンクールの遺言は、1916 年以前には知られていなかっただろうか。1887 年 3 月に出版された『日記』の序文には以下のように記されている――

この日記は私の死後 20 年が経過してからしか出版されないはずだった。それは私自身の固い決心だったのだが、昨年田舎のアルフォンス・ドーデ宅に滞在していたとき、私はこの日記の 1 冊を彼に読んで聞かせた。それはドーデに頼まれて持ってきたものだった。彼は朗読を聞いて楽しみ、印象深く語られる事柄に興味を惹かれ、夢中になって、その抜粋を出版するよう懇願したのである。²⁵⁾

エドモン・ド・ゴンクールはもともと生前に日記を出版するつもりはなかった。アルフォンス・ドーデの懇願によって部分的な刊行に踏み切った経緯が『日記』第 1 巻序文で明かされている。さらに、第 6 巻の序文では、未刊部分についての意思が表明されている――

この最新巻において、私は人々に役立つことができる限り心地よい真実を語るように努める。もうひとつの真実は、それは絶対的な真実だが、私が死んでから 20 年後にやってくる。²⁶⁾

生前に公開する真実は「心地よい真実」とされる。死後 20 年が経って明かされる「絶対的な真実」とも言われる「もうひとつの真実」は、対象となる人々には不快であるかも知れないという意味が含意されている。重要なことは、作家が死んでから 20 年後に公開される未刊日記が存在することが、当初より一般に知られていたということである。ドーデ家と交際のあったプルーストは、遺言執行人のアルフォンス・ドーデ、特にそれを引き継いだ友人レオン・ドーデを通じて、より詳しい状況を知っていた可能性もある。レオン・ドーデはのちに以下のように思い出を語っている――「このような出版は、生存している人たちを傷つけたり、不満を与えたりして、ゴンクール兄弟の思い出が呪われ、裁判に訴えられる危険があるだろう」²⁷⁾。

プルーストは最終篇『見出された時』にゴンクール日記のパスティッシュを

導入すべく、カイエ 55, カイエ 74 にその下書きを書く²⁸⁾。ただし、これらの草稿においては、「未刊日記」が問題になっているわけではない。カイエ 55 ではパスティッシュの下書きが書かれ、カイエ 74 においてはゴンクール日記に触発された語り手の考察が展開される。しかしながら、小説のどの箇所を導入するかはまだ定まっていない。プルーストは第 1 次世界大戦下の 1916-1918 年に『ソドムとゴモラ』から『見出された時』に至る小説後半部に相当する 20 冊の清書原稿を作成している²⁹⁾。そのうちの 1 冊であるカイエ XV において、タンソンヴィル滞在中にジルベルトからゴンクールの「未刊日記」を借りて読むという状況が明確となっている³⁰⁾。そこにおいて初めて「未刊日記」という記述が見られる。『ソドムとゴモラ』以降の 20 冊の清書原稿に属するカイエ XV の執筆が 1916 年以降であることは間違いない。上で見たように、1916 年はエドモン・ド・ゴンクールの死後 20 年目の年であり、遺言によれば、未刊日記が公開されるはずであった。しかし、非公開の延長が決定されたのだった。ジルベルトが所有していたのは、「ゴンクールの未刊日記の 1 巻 un volume du Journal inédit des Goncourt」と記されているように、出版された「未刊日記」である。現実にはまだ刊行されていないのだから、未来を先取りしているとも言えよう。「未刊日記」の公開もしくは出版が延長されたがゆえに、ヴェルデュラン家のサロンを話題にしたパスティッシュは、明らかに架空のものでありながらも、現実の出版によってその虚構性が崩れることがない状況での「ゴンクール未刊日記」導入であったと考えられる。カイエ 55 やカイエ 74 において下書きを書いていた 1915 年段階では、ゴンクール日記の未刊部分が翌年に公表されるのかどうか定かではなかった。1916 年以降では公開の延期は明らかとなった。その時点でプルーストは、虚構の日記を「未刊」と称することによって、疑似的な「真実らしさ」³¹⁾を付与したのではないだろうか。

3. カルネの中の「ゴンクールの日記」

その長い小説創作期間においてプルーストがゴンクール、特にその日記に対して関心を示したのは 1915 年が最初ではなかった。4 冊のメモ帳（カルネ 1-4）を調査すると、ゴンクールの日記についてのメモや引用はふたつの時期に集中していることがわかる。第 1 期は、プルーストが『サント＝ブーヴに反論する』という標題のもとに創作を開始してまもない 1908 年末頃のことで、ゴ

ンクールの日記についてのいくつかのメモがカルネ 1 に見られる。第 2 期は上で見たように 1915 年のことで、カルネ 3 とカルネ 4 に少なからぬメモが記されている。

カルネにおけるゴンクール日記に関するメモを調べると、不思議なことがふたつある。ひとつ目は、言及される日記の年代も巻数も順不同であることだ。プルーストの読み方が無秩序だったのだろうか。たしかに、リュシヤン・ドーデ宛書簡でも触れられていたように、「たまたま par hasard」日記の 1 冊を取り出して読むというような読み方もしていたようだ。ただ、カルネにメモをとる場合には、おそらく記憶に残る挿話や表現を求めて、日記を調べたのではないと思われる。ふたつ目の疑問点は、1915 年頃のものとは推定できるカルネ 3 のメモの中に、ゴンクールの独特な表現が引用されているが、それらが 1908 年に発表されたゴンクールのパステイッシュにも使われていることである³²⁾。カルネ 3 が 1913 年以降に使われたものであることは確かである³³⁾。したがって、パステイッシュに使った表現を再度カルネに記入したのであろう。

第 1 期——批評家サント＝ブーヴと関連して

同じくゴンクールの日記についてのメモでありながら、第 1 期と第 2 期のメモには明らかな相違が認められる。カルネ 1 に見られる第 1 期のメモの特徴は、サント＝ブーヴ批判との関連でゴンクールの日記が引用されていることである。実際、日記の前半にはサント＝ブーヴとの交流についての記述が多い。プルーストが『サント＝ブーヴに反論する』執筆にあたって参考にしたことは間違いない。しかもサント＝ブーヴに関する情報を蒐集しただけではない。プルーストはゴンクール日記の中で語られる文学者たちの逸話を列挙している——「ふたりの娘の間のシャトブリアン」、「少女たちのことを語るバルザック」、「ツルゲーネフと石鱈」、「ミュッセと四千フランの夜食」、「サント＝ブーヴと洗濯女」、「夕陽、ユゴーとともに」³⁴⁾。これらの逸話においては、文学作品の本質とは関わらない作家の社会的・日常的人格が問題となっている。これはまさしくサント＝ブーヴの伝記的批評と軌を一にしている。

これらの逸話の列挙の前には、「avant causeries ce qui est extérieur」（「会話の前、外的なるもの」）というメモが記されている。「会話 causeries」や「外的 extérieur」という言葉は、サント＝ブーヴにもゴンクールにも当てはまる。

サント＝ブーヴは『月曜閑談 *Causeries du lundi*』の作者であり、社交的表層にしか触れることのないその「会話的」側面をブルーストは批評している³⁵⁾。かたや、ゴンクール日記には多くの会話が収録されている。作家自身はそれを記憶の速記術で記録したと言明しつつ、会話に現れる作家たちの特質をとらえようとしたのだった。また、「外的」という言葉もレアリスム文学を批評する際にブルーストが用いる表現である³⁶⁾。

カルネ1に見られる次のメモは注目に値する——「*S^{te} Beuve et les Goncourt et Virgile et Théocrite*」(「サント＝ブーヴとゴンクール兄弟、そしてウェルギリウスとテオクリトス」)³⁷⁾。もちろん、前者2人と後者2人を組み合わせるべきだろう。ふたつのカップルを並列していることに意味がある。ラテン詩人ウェルギリウスの田園詩は、ギリシア詩人テオクリトスの田園詩を受け継ぐものとされている。両者は古代における同系譜の詩人なのだ。したがって両詩人をつなぐ「et」は対立ではなく類似性を示す。それは前2者にも当てはめるべきであろう。ブルーストにとって、サント＝ブーヴとゴンクール兄弟は近代における同系譜の作家なのだ。

近代批評の創始者とも言われるサント＝ブーヴの、日常的・社会的言動に基づく伝記的批評は、同時代作家を評価できなかったがために、ブルーストによって反論されることになる。ブルーストの考えでは、作家は創作において、表面的な社会的自我とは異なる次元で「深い自我」を活動させる³⁸⁾。多くの作家たちの社交生活における言動を描き記録したゴンクールもまた、サント＝ブーヴと共通した志向を持っていたと言えよう。サント＝ブーヴに反論することは、またゴンクールに反論することでもあった。無意識的記憶の体験によって文学の啓示を受けることになる『見出された時』に、虚構のゴンクール未刊日記が導入されたことは、形を変えながらもサント＝ブーヴ反論のテーゼが踏襲されているのだ。

第2期——回想録作家サン＝シモンと関連して

第1次世界大戦が始まってまもない1915年に、ブルーストは再びゴンクールの日記に関心を持ったように思われる。ほぼ同時期にカルネ3とカルネ4に、同作家の日記に関わるメモが頻出する。第1期では日記で語られる逸話への関心を中心であったが、第2期とも呼べるこの時期のメモは、ほぼすべてゴンクー

ルの表現がそのまま引用されている。つまり文体こそが主要な関心事となっているのだ。これらがゴンクール未刊日記のパスティッシュ導入に向けてのメモであることは疑いない。そのことは文学に対する失望から啓示への逆転というモチーフが物語上の逸話とともに暗示されていることから明らかである³⁹⁾。動詞の不定形や形容詞を名詞化するゴンクールの独特な表現は、芸術的文体とも呼ばれるが、プルーストが引用するその表現の多くは絵画やデッサンに関わっている⁴⁰⁾。それはゴンクール兄弟がもともと画家志望であったこととも無縁ではない。また、フランス 18 世紀や日本の美術工芸品の収集家としても知られるほど、作家活動を始めてからも、絵画や美術品への彼らの興味は変わらない。同じく絵画に深い関心を持つプルーストは、しかしながらゴンクールとの違いを意識している——「ある出来事が、私には観察精神がないことを示した(ゴンクールの日記)」⁴¹⁾ ゴンクールにあっては活発に見られる観察精神を、プルーストは重視しない。それは物事の表面に留まるものとして、文学創造に不適切ともみなしている⁴²⁾。

注目すべきことは、この段階でプルーストは、ゴンクールをサント＝ブーヴと並べるのではなく、17 世紀の回想録作家サン＝シモンについてのメモと並列していることである。それらは 1919 年に刊行される『模作と雑録』に掲載する予定であったサン＝シモンのパスティッシュのためのメモであることは間違いない⁴³⁾。ゴンクールとサン＝シモンを結ぶものは何であろうか。どちらも「回想録 *Mémoires*」の作者であることだ。ゴンクールの日記には、「文学生活の回想録 *Mémoires de la Vie littéraire*」という副題が付けられている。それは決して個人的な感情生活を吐露する内面の日記ではない。サン＝シモンがルイ 14 世の宮廷の人々や社交生活を記録したように、ゴンクールは 19 世紀後半の文学者たちの肖像、日々の交流を描き留めた。「回想録」は特定の社会に属する人間の観察記録である。

ゴンクールは貴族としての誇りを持ち、大革命以降の市民社会において、浮薄で不道徳な時代として貶められていた 18 世紀の貴族社会の価値と美意識を復興させる上で大きく貢献した。18 世紀フランスの美術工芸品のコレクターとして知られていたばかりではなく、この時代の歴史も著した⁴⁴⁾。ゴンクールは公的な場における偉人たちの歴史には関心がなく、私的な生活の場における一般人の姿にこそ「人間の真実」が見出せると考えた。そのため 18 世紀の書簡や日

記などを蒐集し、調査したのだった——「ドレスの見本も夕食の献立も保存されていないような時代は、死せる時代であり、再活性できない時代である」⁴⁵⁾。ゴンクール日記もまた、同時代の作家たちの私的な場面における言動や生態を記録し、未来の歴史家のための資料として書かれたものなのである。ゴンクールのこのような歴史観は、伝記的事実に基づいて作家の肖像を描いたサント＝ブーヴと共通したものであるとともに、17世紀のサン＝シモンの『回想録』を意識した一時代の作家生活の証言なのだ。

ゴンクール日記は同時代の作家たちに少なからぬ影響を与えた。第1巻⁴⁶⁾が出版された1887年には、ジュール・ルナールやアンドレ・ジッドが日記を付け始める。モーリス・バレス、クロード・ロマン・ロラン、ヴァレリー・ラルボーなどがその後続く。日記は作家たちの間で流行し、文学ジャンルのひとつとして認知されたと言ってよい。ところが、ブルーストはこのような流行に与しない——

残念ながら、ゴンクールはその代わりに、観察し、メモをとり、日記を付けたのだった。それは大芸術家、つまり創造者がなすべきことではない。⁴⁷⁾

観察と記録に基づく日記ジャンルは、ブルーストにとって「創造」とは異なるものだった。ゴンクールが個別性を重視する「歴史家」、あるいはむしろ「回想録作家」であったとするなら、ブルーストは普遍性・一般性を重んじる「哲学者」だったと言えるかもしれない。興味深いことは、ブルーストがある作家に対する反論を表明するために、あえてその作品の形態を使用していることだ。『サント＝ブーヴに反論する』において、『月曜閑談』の作者の方法論に反論するために、「母との会話」という形式を用いたように、ひとつの時代を証言するための「日記」というゴンクールの写実主義的方法論を批評するために、ブルーストは小説の中に日記形式を採り入れたのだった。

文芸批評を主眼とする『サント＝ブーヴに反論する』は、1910年代に「失われた時」と「見出された時」の対照を構造に組み入れた「時間」の小説に変貌した。最終篇『見出された時』の最終場面では、一連の無意識記憶の体験と、多くの主要人物が老いによって様変わりした姿を現すゲルマント大公夫人宅の

マチネによって、「時間」の破壊作用と永続性がほとんど同時に啓示される。最終篇の冒頭近くに導入された虚構のゴンクール未完日記は、観察に基づく回想録風の表面的な時間記録に留まることによってレアリズム文学の無力を暴露しつつ、終結部に置かれた真の時間の啓示と鮮やかな対照を成す。「サント＝ブーヴ反論」の枠組みを持つ批評作品の創作過程において、作家の日常生活・社交生活を克明に記録するゴンクールの日記はその方法論によって極めてサント＝ブーヴと近い存在であった。それに対して、幻滅から啓示へというベクトルを持つ『失われた時を求めて』の構造の中において架空のゴンクール日記は、否定的な役割でありながらも、時間の発見と啓示へと至るための飛躍を準備するものとして機能しているのだ。

最後に、「カイエ」(ノート)という筆記媒体に注目しよう。ブルーストは、若い頃に執筆していた未完小説『ジャン・サントゥイユ』にはルーズリーフを使用していた。それは原稿用紙のようなもので、小説執筆のための紙媒体として伝統的なものであった。1908年末から書き始めた『サント＝ブーヴに反論する』も最初はルーズリーフを使っていたが、ほどなく「カイエ」の使用を始める。ジャン＝イヴ・タディエは、ブルーストが用いる「カイエ」を学習用ノート(cahier d'écolier)とみなし、母とともに過した学校時代の追憶と関連づけているが⁴⁸⁾、皮製あるいは布張りを施したそれらの「カイエ」は、学習用としては高級すぎる。

ブルーストの「カイエ」使用は、一方では創作方法と関わっていると考えられる。まず右ページに断片的なエピソードを執筆する。空けておいた左ページは、他の部分と関連づけるべく加筆・改変のために使われる。ルーズリーフを用いた『ジャン・サントゥイユ』が挿話の羅列となって、構造化されるに至らなかったのに対して、「カイエ」を使用して創作した『失われた時を求めて』においては、様々なレベルで各場面が関連し合うことによって、物語中で語られる日常生活、恋愛、社交界、芸術体験などが普遍性・一般性を獲得することになった。

ところで、ゴンクール兄弟も日記を付けるために「カイエ」を使用していたのだ。彼らの日記は様々な分量から成る11冊の「カイエ」に記された。最初の5冊は弟ジュールによって書かれ、残りの6冊は弟の死後に兄エドモンによっ

て書かれた。「カイエ」がフランスでいつから使用されたのかよくわかっていないが、ゴンクールは少なくとも 1851 年から「カイエ」を使って日記を書き始めている。その後、モーリス・パレスやポール・ヴァレリーも「カイエ」を使う。ヴァレリーの場合は精神の記録であるが、日々綴るものとして「日記」と呼んでもよい。このように、「カイエ」がしばしば日記執筆のために使用されていた事実は興味深い。プルーストによる、小説執筆のための「カイエ」使用は、ゴンクール以降の作家たちが日記のために「カイエ」を用いたことと無縁ではないように思われる。観察力によって日々の記録を綴るゴンクール流の「日記」を批判しながらも、プルーストもまた「カイエ」を使って、「日記」のように日々小説執筆に専念したのだった。

ゴンクールは、ゾラに先立って庶民の生態を描いたリアリズム作家であった。日記を刊行してからは、小説家という以上に、日記の作者として有名になった。かたやフランス 18 世紀や日本の美術工芸品の収集家であり、愛書家としても知られていた。プルーストは、日記ジャンルに典型的に現れる観察に基づくリアリスムの傾向に反論したばかりでなく、工芸品や書物を所有する欲望に対しても批判的であった。ゴンクールが体现している 19 世紀後半の思潮に反することによって、プルーストは文学・芸術の本質をモノの描写に専念する即物性から解放し、モノに宿る人間精神の表現へと方向転換を遂げたのだった。

註

- 1) Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 4 vol., 1987-89 [éd. abrégée ensuite: RTP], IV, pp. 287-295.
- 2) プルーストと「ゴンクールの日記」というテーマに関する主要な先行研究として次の 2 点がある——Jean MILLY, «Le pastiche Goncourt dans *Le Temps retrouvé*» (*Revue d'Histoire littéraire de la France*, n° 5-6, 1971, pp. 815-835; repris dans *Proust dans le texte et l'avant-texte*, Paris: Flammarion, 1985, pp. 185-211); Annick BOUILLAGUET, *Proust et les Goncourt. Le pastiche du «Journal» dans «Le Temps retrouvé»* (Paris: Lettres Modernes, 1996). ジャン・ミイーはカイエ 55 に含まれるゴンクール日記のパスティッシュの草稿を初めて転写し、主に文体

的側面から分析している。アニック・ブイヤゲは、ブルーストとゴンクール兄弟との関係を総合的に調査した上で、ゴンクール日記のパスティッシュを、構造、テーマ、人物、文体などの観点から考察している。本稿においては、ゴンクール日記の出版状況を整理しつつ、とりわけ「カルネ」に見られるメモの分析に基づき、ブルーストの創作と関連づけながら、ゴンクール日記の役割の変化を考察する。

- 3) オートゥイユのゴンクール家の収集品については、『ある芸術家の家』において詳細に紹介されている。Voir Edmond de GONCOURT, *La Maison d'un artiste*, Dijon: Éd. de l'Echelle de Jacob, 2 vol., 2003.
- 4) エドモン・ド・ゴンクール生誕百周年にあたる 1922 年に、『ゴーロワ』紙はブルースト、ルネ・ビゼ、ジャン・ジロドゥーにゴンクールの影響についてのエッセー執筆を依頼した。1919 年に『花咲く乙女たちの陰に』によってゴンクール賞を受賞していたブルーストは、寄稿したエッセーの中で次のように書いている——「20 歳のとき、私はパリおよびサン＝グラシアン、アルフォンス・ドーデ夫人宅やマチルド大公夫人宅でしばしばゴンクール氏に会った。アルフォンス・ドーデの輝かしい美しさは、ゴンクール氏の傲慢にして臆病な老人としての美しさを凌駕するものではなかった」(«Les Goncourt devant leurs cadets: M. Marcel Proust», «Le Centenaire d'Edmond de Goncourt», *Le Gaulois du dimanche*, supplément littéraire, samedi le 27 mai 1922; voir Marcel PROUST, *Contre Sainte-Beuve* précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles* [éd. abrégée ensuite: CSB], Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1971, pp. 641-643)。
- 5) 1894 年 12 月頃に書かれたと推定されているレーナルド・アーン宛書簡:「私の師匠 [レーナルド・アーン] がアルフォンス・ドーデ夫人宅に連れていってくれたらとても楽しいでしょう」(*Correspondance de Marcel Proust*, éd. de Philip KOLB, Paris: Plon, 21 vol., 1970-93 [éd. abrégée ensuite: *Corr.*], I, pp. 356-357)。1895 年 2 月 22 日と推定されているアルフォンス・ドーデ宛の書簡で初めての訪問についてのお礼を述べている (*Corr.*, I, p. 369)。
- 6) 「昨日ドーデ家で夕食。坊や [レーナルド・アーン]、ゴンクール氏、コペ、フィリップ氏、ヴァケ氏が同席。悲しい気分で確認したことは、ぞっとするほどの物質主義です。これは〈知的な〉人々なのに異常なことです。性格や才能を身体的習慣や人種によって判断するのです。ミュッセ、ボードレール、ヴェルレーヌの違いを彼らが飲むアルコールの質によって説明したり、ある人の性格をその人の人種で説明するのです (反ユダヤ主義)」(レーナルド・アーン宛書簡, *Corr.*, I, p. 443)。
- 7) 「同じくユダヤ人であるアーン青年」(Edmond et Jules de GONCOURT, *Journal, Mémoires de la vie littéraire*, Paris: Robert Laffont, coll. «Bouquins», 3 vol., 1989, t. III, p. 1245)。
- 8) *À la recherche du temps perdu*, éd. de Pierre CLARAC et André FERRÉ, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 3 vol., 1954, t. III, p. 1118.
- 9) Kazuyoshi YOSHIKAWA, «Études sur la genèse de *La Prisonnière* d'après des

- brouillons inédits», thèse de doctorat, 1976, t. I, pp. 8-11, p. 11, note 3.
- 10) *Corr.*, XIV, pp. 280-285; voir *CSB*, pp. 559-564.
 - 11) *Corr.*, XIV, pp. 77-78.
 - 12) *Corr.*, XIV, pp. 77-78, 202, 249 et 346.
 - 13) Jean MILLY, *Proust dans le texte et l'avant-texte*, Paris: Flammarion, 1985, p. 186.
 - 14) *Corr.*, XIV, p. 78, note 1.
 - 15) Marcel PROUST, *Carnets*, éd. établie et présentée par Florence CALLU et Antoine COMPAGNON, Paris: Gallimard, 2002, p. 243. 1913年9月20日付『フィガロ』紙に掲載されたアンドレ・ボーニエの記事についてのメモ, アルベルチヌ登場前の恋人名マリア, 同年6月に校正刷りの中で初めて現れた「ヴァントウイユ」という音楽家名などに基づく推定。
 - 16) *Carnet* 3, f^{os} 32 v^o-35 v^o; *Carnets*, pp. 302-308.
 - 17) *Corr.*, XIV, p. 76.
 - 18) *CSB*, pp. 24-27.
 - 19) «C'était un volume du journal inédit des Goncourt.» (*RTP*, IV, p. 287).
 - 20) *Journal des Goncourt, Mémoires de la Vie littéraire*, Paris: Charpentier, 9 vol., 1887-96.
 - 21) *Journal des Goncourt, Mémoires de la Vie littéraire*, éd. texte intégral, établi et annoté par Robert Ricatte, Monaco: Imprimerie nationale de Monaco, 25 vol., 1956-58.
 - 22) エドモン・ド・ゴンクールの遺言については, リカット版『ゴンクールの日記』に寄せられたアカデミー・ゴンクールの序文を参照のこと。なお本序文はロベール・ラフォン版にも再録されている (*ibid.*, p. 1)。
 - 23) *Mercure de France, Le Temps, Le Matin, L'Œuvre*, etc. (*Journal des Goncourt*, éd. Laffont, *op. cit.*, t. I, pp. XI-XII)。
 - 24) Jean MILLY, *op. cit.*, p. 187. アニック・ブイヤゲもまたゴンクールの未刊日記の公開をめぐる新聞紙上の論争を, プルーストがそのバスティッシュを「未刊」日記とした理由とみなしている (Annick BOUILLAGUET, *op. cit.*, p. 13)。
 - 25) ゴンクールの序はアカデミー・ゴンクールの序文に引用されている (*Journal des Goncourt*, éd. Laffont, *op. cit.*, t. I, pp. 1-2)。
 - 26) *Ibid.*, p. 1.
 - 27) Léon DAUDET, *Souvenirs littéraires*, Paris: Grasset, 1968, p. 252.
 - 28) Voir *RTP*, IV, pp. 750-761.
 - 29) プルースト自身によってローマ数字で «I-XX» と番号を付された 20 冊の清書原稿の年代設定については, プレイヤッド版のジャン＝イヴ・タディエによる序文を参照のこと (*RTP*, I, pp. LXXXVI-LXXXVII)。1916年のガリマール宛書簡 (*Corr.*, XV, p. 130) に見られるように, プルーストが「ソドムとゴモラ」をひとつの巻として構成することを決意したのは同年のことであり, 20 冊の清書原稿はこの決意に

基づいている。ただし、大戦下の執筆状況については、明らかな点があり、いっ
 そうの調査が必要である。

- 30) Cahier XV, f° 88 r°: «Mais elle [= Gilberte] me prêta un volume ~~des Mémoires~~
 du Journal inédit des Goncourt». «un volume」以下は抹消線によって消されてい
 るが、左ページや余白部分で類似の文が繰り返し書かれている。清書原稿でありな
 がらも、この箇所は「日記」の導入状況についての最初の下書きである。「回想録
 des Mémoires」と一旦書いたあと、「未刊日記 Journal inédit」という語が記される
 ことから、「未刊日記」が最初に登場した草稿であると推測できる。
- 31) アニック・ブイヤゲは、ゴンクール日記のバスティッシュが「未刊」とされたこと
 について、一般読者に知られていないテキストであるため、公開された日記の抜粋
 としてよりも「疑似的真相らしさ pseudo-vraisemblance」が高まると指摘している
 (Annick BOUILLAGUET, *op. cit.*, p. 13)。
- 32) «Goncourt un faire miniaturé» (Carnet 3, f° 30 r°) / «Et il cite ce trait qui
 ressort joliment dans le faire miniaturé de son dire» (CSB, p. 25); «Goncourt
 fichtre» (Carnet 3, f° 30 v°) / «Sur quoi, fichtre!» (CSB, p. 25); «Goncourt à
 l'encontre du jugement de» (Carnet 3, f° 31 r°) / «et à l'encontre du jugement
 porté par la charmante femme qu'est Mme de Nadaillac» (CSB, p. 24)。
- 33) 前註 15 を参照のこと。
- 34) Carnet 1, f° 19 r°; *Carnets*, p. 64. それぞれの逸話の出所については、同書同頁の
 注 156-164 を参照のこと。
- 35) 「サント＝ブーヴはその生涯のいかなる時においても、文学を真に深く理解したよう
 には思えない。彼は文学を会話と同じ次元に置いている」(CSB, p. 225)。
- 36) 20 歳頃に執筆したと推定されているエッセーの中で、フローベールとルコント・
 ド・リールについてコメントしつつ、「真の美は、これほど外的であるはずはない」
 («elle ne peut être si extérieure, la véritable Beauté», CSB, p. 342) と述べて
 いる。
- 37) Carnet 1, f° 22 r°; *Carnets*, pp. 69-70 における加筆。
- 38) CSB, pp. 221-222.
- 39) Carnet 3, f° 33 r°: 「それはこんなふうだった。私は教会やヴィヴオンヌ川を再見
 すると大いなる感覚を味わえると思っていた。教会は平凡で修復されているように
 見え、ヴィヴオンヌ川は汚く見えたのだった。帰りの木々。私には観察精神がない
 ことがある出来事でわかった (ゴンクールの日記)」(*Carnets*, p. 304)。
- 40) Carnet 3: «Goncourt un faire miniaturé» (f° 30 r°); «une rose où il y a dans
 le dessin comme l'évanouissement d'une syncope, une rose névrosée, la rose
 décadente des vieux siècles» (f° 30 v°); «Goncourt se détachant sur l'aplât d'un
 mur» (f° 31 r°, souligné par Proust); «Goncourt donnant, pour le regardeur, le
 crayeux du pastel le gouaché de son dessin» (f° 31 r°). Carnet 4: «la tête de
 St Jean que la peinture italienne offre à Hérodiade» (f° 29 v°); «le coloriage

artiste» (f° 29 v°).

- 41) *Carnet* 3, f° 33 r°; *Carnets*, p. 304. 前註 35 を参照のこと。
- 42) 「私の中には、ある程度よく見ることができる人物がいた。しかし、それは間歇的な人間で、それが息を吹き返すのは、いくつかの物に共通する何らかの一般的な本質が現れるときだけである。その時、その人物は眺め、そして聞く。しかし、それはかなり深いところにおいてなのだ。しかるに観察力はその深さを活用できなかった」(*RTP*, IV, p. 296)。
- 43) «Dans les mémoires de Saint-Simon», *Pastiches et mélanges*, CSB, pp. 38-59.
- 44) *Histoire de la société française pendant la Révolution* (1854); *Histoire de la société française pendant le Directoire* (1855); *Portraits intimes du XVIII^e siècle* (1858); *Histoire de Marie-Antoinette* (1858); *La Femme au XVIII^e siècle* (1862), etc.
- 45) 1859 年 6 月 29 日 - 8 月 7 日 付 日 記 (*Journal des Goncourt*, éd. Laffont, *op. cit.*, t. I, p. 466)。
- 46) *Journal des Goncourt, Mémoires de la Vie littéraire*, Paris: Charpentier, 9 vol., 1887-96.
- 47) 1922 年 5 月 27 日 付 『ゴーロウ』紙に寄せられたブルーストのエッセー ((«Les Goncourt devant leurs cadets: M. Marcel Proust», CSB, p. 642)。同紙はエドモン・ド・ゴンクール生誕百周年の特集を組み、1919 年にゴンクール賞を受賞したブルースト、およびルネ・ビゼ、ジャン・ジロドゥーにゴンクールについてのエッセーを依頼した。
- 48) 「彼はラスキンの翻訳以来、もはや学習用ノート (cahiers d'écolier) しか使用しない。それは子供時代への感動的な回帰とも言えよう」(Jean-Yves TADIÉ, *Proust. La cathédrale du temps*, Paris: Gallimard, coll. «Découvertes», 2000, p. 110)。